

戯曲『ベルゲンのならず者』におけるカール・ツツクマイヤーの反ナチズム

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2020-11-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松澤, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21283

戯曲『ベルゲンのならず者』における カール・ツックマイヤーの反ナチズム

Antinazismus von Carl Zuckmayer in dem Drama „Der Schelm von Bergen”

博士後期課程 独文学専攻 2017 年度入学

松 澤 智 子

MATSUZAWA Tomoko

【論文要旨】

1933 年、カール・ツックマイヤーは、中世の身分社会を題材にした戯曲『ベルゲンのならず者』を出版した。オーストリア政府が「身分制国家」を掲げた時期と重なり、これを示唆しているという研究がある。反対に、時事性の問題から離れ、ファンタジーの世界を描いたという研究もある。この作品は、ナチスが政権を握ったことにより、ツックマイヤーが作家としての立場を崩された直後の作品として注目すべきものである。そこで本稿では、この作品がナチス政権を批判した反ナチズムの作品であることを明らかにしていく。

1930 年代初頭のドイツとオーストリア、両国の政権が、ツックマイヤーの作品にどのような影響を及ぼしたかを考察した。ナチス政権が作品全体を取り巻くテーマであること、そして、「身分制国家」は、反ナチズム作品を隠す役目を担っていることを分析した。さらに、他の幾つかの作品が、この戯曲の構成にどう反映しているのかも考察することにより、反ナチズムと身分制国家を語る上で、老死刑執行人が重要な登場人物であることも明らかになった。戯曲『ベルゲンのならず者』は時事問題を避けた作品ではなく、続けて発表された戯曲の『ベルマン』と『悪魔の将軍』の先駆けとなる反ナチズムを訴える作品であった。

【キーワード】 カール・ツックマイヤー、シェルム・フォン・ベルゲン、死刑執行人、身分制国家、ナチス

序 章

カール・ツックマイヤーは、実際に起きた事件を題材にして執筆した戯曲『ケーペニックの大尉』(1931)の次作として、中世を舞台にした戯曲『ベルゲンのならず者』を発表した。1932年8月14日から執筆が始まり1933年11月14日に完成したこの作品は、皇帝と皇妃が同席してベルゲン伯爵の子どもの洗礼に参列しようとする序幕から始まり、死刑執行人の息子と皇帝に愛されている若い皇妃の身分を越えた恋愛を中心に展開する三幕構成である。この時期、反ナチスを表明していた作家たちはドイツ国内で作品を出版することは困難であった。ツックマイヤーも反ナチスを表明していたが、国内での出版は許されていたため、ウルシュタイン傘下の出版社プロピュレーエンから出版することができた。ただし国内での上演は禁止されており、初演は1934年11月6日にウィーンのブルク劇場で迎えることになる¹。

ツックマイヤーがこの作品を執筆している最中、ヴァイマル体制は政権争いの末に終焉を迎え、ナチス党首ヒトラーが権力を振るい始める。その手始めの一つが焚書である。ナチスはツックマイヤーの作品もその対象とした。ドイツでの活動が制限されたツックマイヤーは、夏の住居として使用していたザルツブルク郊外のヘンドルフの家に移り住み、ナチスがオーストリアに進駐する1938年3月11日までその地で過した²。

ヘンドルフで執筆した作品が、『ベルゲンのならず者』と『ベルマン』(1937)である。亡命早期の両作品は中世を舞台にしていることから、「1933年から1938年まで田舎の隠れ家で静かに作業をしていた。この時期の著作物は、ツックマイヤーが政治的な日々の問題を避けていたことを示している³」と、政治的問題が作品に反映されていないと指摘する先行研究がある。エンゲルジunkerマーレークは、皇妃に子どもが授かるように助言を与える老死刑執行人の言葉づかいに対して、「古くからの習慣や迷信、そして呪いを、特有の古風な言い回しを用いて、時間と空間を忘れさせる⁴」、「伝承や伝説、そしておとぎ話の世界に住んでいる⁵」と指摘している。さらに、序幕で後朝の歌や叙情詩を用いることで、「遠く離れた世界の雰囲気さらに強められている。現在とのあらゆる繋がりが避けられ、普遍性を増す⁶」と、ツックマイヤーがおとぎ話を書いたという指摘をしている。果たして、ツックマイヤーは、中世を舞台にした作品を書きたかったのであろうか。

¹ Siegfried Mews, *Die unpolitischen Exildramen Carl Zuckmayers*. In: Jahrbuch für Internationale Germanistik, Reihe A, Band. 3., Bern: Peter Lang, 1977, S. 140.

² ツックマイヤーは『楽しいブドウ畑』(1925)が成功した際に、豊かな自然が一望できるザルツブルク近郊の静かな村ヘンドルフに別荘を購入し、夏はヘンドルフで、冬はベルリンで過ごした。Hans Wagener, *Carl Zuckmayer*, München: C.H.Beck, 1983, S. 29-31.

³ Thomas Ayck, *Carl Zuckmayer*, Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Taschenbuch, 1977, S.105.

⁴ Ingeborg Engelsing-Malek, *'Amor Fati' in Zuckmayers Dramen*, Konstanz: Rosgarten Verlag, 1960, S. 68.

⁵ Ebd..

⁶ Ebd..

先述したように、ツックマイヤーは反ナチスを表明し、ナチスと戦う決意をした作家である。自身の作品が燃やされる屈辱を受け、逮捕される可能性があることを覚悟で活動を続けようという作家が、中世に想いを馳せたファンタジー作品を発表するとは考えられない。社会問題に正面から向き合い、新たに台頭したナチス政権を危険視し、今まさにドイツで起きている問題を大衆に示す作品を書くことこそが、ツックマイヤーが担った作家としての使命ではないだろうか。中世を舞台にすることで、強められていくナチスからの監視を避け、ナチス批判を込めた戯曲の執筆を試みたのではないだろうか。日本でもドイツでも先行研究が乏しいこの作品は、人気戯曲作家として地位を確立していたツックマイヤーが、政権を握ったナチスにより、その立場を崩された直後に発表した作品として注目すべきである。

『ベルゲンのならず者』が非政治的作品と指摘される一方で、当時の政治状況が反映されていることを唱える先行研究もある。ニケルは、この作品が、「身分制国家」の保持を目指すエンゲルベルト・ドルフース (Engelbert Dollfuß, 1892-1934) のオーストリア・ファシズム運動を反映した作品である、と述べている⁷。また、ニケルと同様にロータームントも、ドルフースの政治思想との関連性を指摘している⁸。

ここで、戯曲『ベルゲンのならず者』のあらすじを見ておこう。

特権を擁護しようとする騎士と市民階級間の衝突が皇帝の領内で頻繁に起きるため、皇帝は鎮圧に赴く日々が続いていた。老齢の皇帝は「強い帝国権力」を打ち立てたためにも世継ぎを望み、若い皇妃と再婚したのであるが、子宝に恵まれなかった。皇妃の妹であるベルゲン伯爵夫人の館では、結婚後数年してやっと子が生まれた。皇帝と皇妃は、その子の洗礼に揃って立ち会っていたが、再び一揆が勃発したという知らせが入り、洗礼を中断して皇帝はその鎮圧に向かう。伯爵夫人は、自然界のことに通じ、不妊の女性に秘法を授けてくれる知識豊富な老死刑執行人の的確な助言に従ったことで子を授かった、と皇妃に打ち明けた。この老死刑執行人の先祖は、かつて伯爵令嬢の侍医を務めていたが、令嬢を産褥で死なせてしまった罰として、現在の家業を世襲で継承することになったのであった。老死刑執行人には、息子ヴィンセントがいる。本当の身分を悟られないよう日頃から貴族として振る舞っているヴィンセントと、身分を隠し訪ねて来た皇妃が出会い、二人は恋に落ちる。間もなくして皇妃が身ごもると、二人は逃避する計画を立てた。気配を察した侍従が皇妃に忠告をする最中、討伐中の皇帝が血気盛んに戦う様子が伝えられたことによって、皇妃は逃避行を思い留まるのであった。一方、ヴィンセントは家業を捨てて恋人と異国へ行く計画を父親

⁷ Gunther Nickel, *Carl Zuckmayers Der Schelm von Bergen — eine kritische Auseinandersetzung mit dem Austrofaschismus*. In: (Hrsg.) Gunther Nickel, Erwin Rotermund und Hans Wagener, *Zuckmayer-Jahrbuch*, Band 1., St. Ingbert: Röhrig Universitäts- verlag, 2001, S. 216-231.

⁸ Erwin Rotermund, *Zwischen Anpassung und Zeitkritik. Carl Zuckmayers Exildrama Der Schelm von Bergen und das stände- staatliche Denken um 1930*. In: (Hrsg.) Nickel, Rotermund und Wagener, *Zuckmayer-Jahrbuch*, a. a. O., S. 233-249.

に打ち明けるも、死刑執行人を継いで欲しいと父親から頼まれ、承諾せざるを得なくなる。出発予定の晩に二人は再会し、互いに身分を打ち明ける。翌朝、皇帝の凱旋と延期された命名式の名目で罪人に恩赦が与えられると、ヴィンセントは首切り役を務めずに済んだ。祝宴の夜、ヴィンセントは宴に出席して皇妃とダンスを踊るが、侍従に見抜かれて皇帝の前に引き出されてしまう。掟によれば、死刑執行人は人里離れた荒野に住み、街に来てはならないことになっている。この掟をなぜ破ったのか皇帝に問われたヴィンセントは、「愛のため、高貴なものへの憧れのためだ」と答えて助命嘆願する。死刑執行人を処刑しても皇妃の名誉が汚れたままであると考えた皇帝は罪を許し、その場で刀礼を施してヴィンセントを騎士にするのであった⁹。

『ベルゲンのならず者』は、身分違いの恋愛を中心に展開するのであるが、「支配者である皇帝」の存在を印象付ける場面で終幕をむかえる。ドルフースが掲げる「特定の身分・階級だけが政治に関与することができる」という身分制国家には、「国や政治を支配する者」という戯曲との共通点が見られる。その視点だけを捉えると、ニケルたちの作品解釈に反論の余地はない。しかし、彼らの先行研究は、ドルフースの政策と中世の身分を結び付けたことだけで終わっている。ロータームントは、「ナチ政権の最初の年に中世の帝国に遡ることで第三帝国との対立を強調しようとしている¹⁰」と記してはいるものの、その先に論を進めていない。また、1934年当時の評論家たちは、当然ドイツにおける政権交代に関する作品の時局性について指摘できる状況ではなかったであろうが、そのほとんどがオーストリアの政治状況、つまり、中世を手本にオーストリア民主体制を独裁的な身分制国家に変えようとするドルフース政権と重ねる作品解釈をしている¹¹。

この作品には反ナチズムと解釈できる箇所が存在している。ツックマイヤーがオーストリアの政治状況を強く連想させる作品を発表した背景には、その意図があると考えられる。ナチス台頭時期に、ツックマイヤーがどのような手法を用いてナチスの危険性を警告したのかを分析し、『ベルゲンのならず者』が反ナチズムの作品であることを本稿で明らかにしていく。

第1章 作品に反映された「身分制国家」

ドルフースが掲げた「身分制国家」の基盤には、構造が単純な農業社会があった。ドルフースは、カトリック的な身分制の農業社会に心酔し、「中世は、国民が職業身分的に組織編成されていた時代であり、労働者たちが自分の主人に対して、反抗も組織化もしない時代であった¹²」と演説し

⁹ Carl Zuckmayer, *Der Schelm von Bergen*. In: Carl Zuckmayer, *Gesammelte Werke*, Band 3., Frankfurt am Main: S. Fischer, 1960, S. 415–494.

¹⁰ Rotermund, *Zwischen Anpassung und Zeitkritik*. In: (Hrsg.) Nickel, Rotermund und Wagener, *Zuckmayer-Jahrbuch*, a. a. O., S. 248.

¹¹ (Hrsg.) Gunther Nickel und Ulrike Weiß, *Carl Zuckmayer 1896–1977 “Ich wollte nur Theater machen”* (Marbacher Katalog 49), Stuttgart: Deutsche Schillergesellschaft Marbach am Neckar, 1996, S. 233.

¹² (Hrsg.) Hofrat Edmund Weber, *Dollfuß an Österreich. Eines Mannes Wort und Ziel*, Wien: Reinhold Verlag, 1935, S. 20.

た。そして、その社会を再構築したいという考えの下に、公務員身分と農業・林業身分を作った。職業身分制は、政府がコントロールする領域を広げて国家の負担を軽くする構想であった。しかし、公的勤務を厳しい制御の下に置くことで介入は成功したが、経済の領域においては思い通りに進まなかった。ドルフース政権が経済の統制に失敗すると、次第に多くの企業家層がナチズム陣営に転じていったのである¹³。

ドルフースが身分制国家を推し進めた背景には、オーストリアに迫りくるナチスの存在があった。1919年に結党した当初のナチスは、幾多ある群小右翼政党の一つに過ぎなかった。だが、1929年の世界恐慌によりドイツの街に失業者があふれだすとナチスの躍進が始まる。第八党だったナチスは、1930年9月の国会議員選挙で一気に第二党に、1932年7月の選挙で第一党になる。しかしヒトラーは首相に就けず、同年11月の選挙でナチスの議席は激減する。第一党の座が揺るぐことはなかったが、大企業の国有化や私有財産の廃止などを訴える共産党が、労働者の支持を獲得したことで議席を伸ばすことになった¹⁴。この頃、ヒンデンブルク大統領を悩ます事態が発生する。破産した貴族の土地を没収して、それを土地を持たない農民たちに分配する改革を政府が発表すると、この改革に反発した土地貴族たちは、ヒンデンブルクにブラウン首相の罷免を要求した。ヒンデンブルクは、迫りくる共産主義革命を防ぐためにもナチスを利用することを考え、1933年1月30日、ナチスが保守派と連立政権を樹立することを前提として、ヒトラーを首相に任命した¹⁵。ところが連立政権の発足直後、ヒトラーは国会を解散し選挙を行ったのである。ナチスは絶対多数の獲得に成功すると、国会や大統領の承認なしに内閣が自由に法律を制定できる「全権委任法」を可決させた。強制収容所の設置、ナチス指導によるドイツ労働戦線の結成、秘密国家警察の創立など、権力が集中するような組織作りを推し進め、一党独裁体制を確立していく。1934年8月2日にヒンデンブルクが死去すると、ヒトラーは首相と大統領の権限を持つ権力者、総統に登りつめるのであった¹⁶。

ドイツでナチスが権力を握ると、オーストリア政府は国の独立維持のためにナチスと戦うことになる。それまで築き上げてきた両国の関係が崩れ始め、1932年、カール・ブレシュに代わり首相に就いたドルフースは、社会民主黨員や共産主義者などの左翼勢力とナチスを禁じ、彼らに容赦のない断固たる処置を施した¹⁷。ドルフースの対策に賛同する知識人たちには、小説家ロベルト・ムーシル (Robert Musil, 1880-1942) や『炬火 (*Die Fackel*)』の創刊人カール・クラウス (Karl Kraus, 1874-1936) などがいた。ムーシルは友人に宛てた手紙で、ナチスに屈することなくオー

¹³ エルンスト・ハーニッシュ著、岡田浩平訳『ウィーン/オーストリア 二〇世紀社会史 1890-1990』(三元社、2016)、486-487頁参照。

¹⁴ NHK取材班編『ヒトラーと第三帝国』(KTC中央出版、2003)、86頁参照。

望田幸男『ナチスの国の過去と現在 ドイツの鏡に映る日本』(新日本出版、2004)、78-80頁参照。

¹⁵ NHK取材班編 (KTC中央出版、2003)、87-88頁参照。

¹⁶ 同上 (KTC中央出版、2003)、31-32、89-90頁参照。

¹⁷ ハーニッシュ (三元社、2016)、488-489頁参照。

ストリアが独立維持している状況を「ドルフースの多大な功績¹⁸」と称えた。クラウスは「ドルフース下のファイ少佐は『ブラットハウンド』だから、奴を非難するべきだと（皆が）私に要求している。しかし、ブラットハウンドがヒトラーに立ち向かうように飼いならされているならば、そのブラットハウンドも私の友人だ¹⁹」と言った。そして、ツックマイヤーは、ドルフースの政策を振り返り、以下のような判断を自叙伝に記している。

ドルフース首相は、「秩序の復旧」の後も外交を絶やさず、そして国内で安定した政治を試みようとしたその政治家らしい賢明さで、「新しい政権」を友好的な光の中で出現させた。一たとえそれがオーストリアの緩和的な、しかし決してテロ行為的ではなく、ファシズムの手法であったとしても。彼の掲げた看板は「身分制国家」であった。その言葉をあらゆる論説で読むことができたが、この言葉に隠されている何かを論説の筆者を含め、思い浮かべた者はいなかった。知識人たち、とりわけヒトラーが支配するドイツから逃げてきた者達にとっても、この「左右されないオーストリア」は、取るに足らない小さな悪に見えた²⁰。

ツックマイヤーが、ドルフースの政治がファシズムであることを認識していたことがわかる。ファシズムから逃れるためにドイツから離れたのならば、オーストリアを選ばずに他の国へ行くはずである。しかし、そうはしなかった。ツックマイヤーにとっては、生き延びるためだけではなくドイツ語圏で活動も続けることも重要であったのである。ナチスが支配するドイツに留まることが不可能な状況の中、身の安全と活動を確保するためにオーストリアに滞在することは最善であると判断し、実際に作家としての活動ができることで、オーストロファシズムと十分に折り合いをつけていたのではなかろうか。そして、オーストリアで活動続けるため、ツックマイヤーは身分の重要性を作品に織り込み、ドルフースが掲げる身分制国家に賛成しているように解釈させた可能性は十分に考えられる。中世の身分秩序が顕著に現れている場面の一例として、ヴィンセントと皇妃の駆け落ち計画に気が付いた皇妃の従事レモジールが、皇妃を論ずる言葉が挙げられる²¹。

¹⁸ Brief vom 21. Oktober 1933. In: (Hrsg.) Adolf Frisé, *Robert Musil, Prosa, Dramen späte Briefe*, Hamberg: Rowholt, 1957, S. 727–728.

¹⁹ Karl Kraus, *Die dritte Walpurgisnacht*. (Hrsg.) Heinrich Fischer. Eimalige Sonderausgabe, die Bücher der Neunzehn, Band 152, München: Kösel-Verlag, 1967, S. 314.

エーミール・ファイ (Emil Fey, 1886–1938) は、キリスト教社会党員で反共産主義的な自警団「防郷団」のリーダー。ドルフース内閣では副首相を務めた。

Austria-Forum-das Wissensnetz aus Österreich. URL: https://austria-forum.org/af/AEIOU/Fey,_Emil (abgerufen am 10. 4. 2020)

²⁰ Carl Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir. Horen der Freundschaft*, Frankfurt am Main; S. Fischer, 1996, S. 29.

²¹ Zuckmayer, *Der Schelm von Bergen*. In: Zuckmayer, *Gesammelte Werke*, a. a. O., S. 468.

レモジール：(前略) 上にも下にも迷い込まず、地が呑まぬ様、天火が焼き尽さぬよう、人間をひきとめておりますのは、神との、神聖にして解約告知権のない盟約一つまり、身分なのでございます！

皇妃：身分は神聖なのか。心よりもっと神聖なのか。

レモジール：身分がすべてでございます。それがすべて、心は一部でございますから。(中略) 星座は決して触れることはなくとも支え合って、変わることなく空にかかっております一人間も同じこと、銘々が己の身分にかなっております。それゆえ、分を越えるものは底なしへと落ちるのです。

ドルフースが農業を重視したように、発足当初のナチスも農業従事者を味方に付けていた。ナチスが勢力を伸ばし第一党の座を勝ち取った要因の一つに、農業従事者から支持を広げた経緯があったが、産業化・近代化を視野に入れ始めると、ナチスは農業を軽んじていく²²。そして、ヒトラーが1932年1月にデュッセルドルフで工業家たちに向けて熱烈に演説をした結果、資本家団体はナチ党に膨大な資金援助するのであった²³。戯曲のタイトル『ベルゲンのならず者』の「ベルゲン」はデュッセルドルフ郊外の町であることから、おそらくツックマイヤーは、この演説も念頭に置いて戯曲を執筆したのではなからうか。そして、「身分」と「ベルゲン」を組み合わせることで、ツックマイヤーは反ナチスを巧みに訴える戯曲を完成させたといえるのではないだろうか。

第2章 戯曲執筆に影響を与えた「シェルム・フォン・ベルゲン」

「シェルム・フォン・ベルゲン」は、この名で呼ばれている死刑執行人、あるいは皮剥職人が登場する伝承によって知られている。人名として初めて使用されたのは、死刑執行人が職業として定着する以前の1194年の書類に、ヴェルナー・シェルム・フォン・ベルゲン(Werner Schelm von Bergen)であることが確認されている²⁴。名の由来は明らかになっていないが、騎士階級の貴族であったフォン・ベルゲン家の主要城が、現在のフランクフルト・アム・マイン近郊のベルゲンにあることと、この地域に皇帝と死刑執行人の伝承が多く伝わっていることに何かしらの関係があるらしい。皇帝と死刑執行人を題材にした伝承は、「山林監督者と死刑執行人 (*Der Förster und die Schelme*)」や「皇帝フリードリヒとベルゲンの死刑執行人 (*Kaiser Friedrich und der Schelm von Bergen*)」、 「死刑執行人と皇妃 (*Der Schelm und die Kaiserin*)」などがある²⁵。さらに、これらの伝

²² 松田行正『RED ヒトラーのデザイン』(左右社, 2017), 57頁参照。

²³ 望田(新日本出版, 2004), 79頁参照。

²⁴ Heinz F. Friedrichs, *Zur Frühgeschichte der Ministerialenfamilien von Bergen und Schelm von Bergen*. In: Hanauer Geschichtsblätter 18., Hanau: Hanauer Geschichtsvereins E. V., 1962, S. 21, 27-30.

²⁵ Karl Lyncker, *Deutsche Sagen und Sitten in hessischen Gauen*, Hildesheim, Zürich, New York: Georg Olms, 1994, S. 150-152.

「山林監督者と死刑執行人」ヴェルツブルクに向けて家来と共に旅をしていた皇帝は、その途中で三人の男

承から影響を受けたとされるバラードも存在する。例えば、カール・ジムロック (Karl Simrock, 1802-1876) の「ベルゲンの死刑執行人 (*Der Schelm von Bergen*)」(1837) である。フランクフルトの宮廷で開催される仮面舞踏会で皇妃と踊った罪で死刑を言い渡された死刑執行人が、自分を騎士にすることで皇妃の名誉は保たれると、皇帝に提案してその身分を手に入れる場面を描いたバラードである。

ツックマイヤーは、戯曲『ベルゲンのならず者』に関するインタビューで、「友人が会話の途中で『ベルゲンのならず者』と言った時に、明確なイメージを得たわけではないが、戯曲として作り上げたいという思いに駆られた²⁶」と答えた。その友人の名は書き残されていないが、おそらくマックス・ラインハルトであろう。ラインハルトは 1918 年にザルツブルクにあるレオポルトクロン城を購入し、そこで暮らし始める。現在ホテルとして活用されているこの城は、1736 年にザルツブルク大司教であったレオポルト・アントン・フィルミアンによって建てられ、後にユリウス・フォン・デア・トラウン (Julius von der Traun. 本名 Julius Alexander Schindler, 1818-1885) が城の持ち主となった。フォン・デア・トラウンはこの城で起きたことを題材にして、短編『ベルゲンのならず者』(1837) を執筆し、ハイネはこの短編小説の終盤部分を基にしてバラード『シェルム・フォン・ベルゲン』(1846) を詩作した。ツックマイヤーはラインハルトを訪ねた際にこれらの話をして、自身の戯曲の基盤が貴族をテーマにしたものであることを語っている²⁷。また、ツックマイヤーの妻が『ヴィーナー・アルゲマイネ・ツァイツング』紙で、「ハインリヒ・ハイネは、その場面 (皇妃と死刑執行人がダンスをする場面) を一篇の詩で詳細に叙述しました。(中略) 夫は自身の作品を手掛ける際に、短編小説を頼りにしました²⁸」と述べている。ツックマイヤー自身が、ハイネのバラードを反映させたことを明確に記す資料は残っていないが、デュッセルドルフで生まれたハインリヒ・ハイネのバラード『シェルム・フォン・ベルゲン』も執筆に影響を与えていると考えられるのではなかろうか。そこで、フォン・デア・トラウンの短編とハイネのバラードが、ツックマイヤーの戯曲にどう反映しているか考察する。

に会う。皇帝はその者達から、死刑執行人とその手下どもが皇帝の暗殺を計画しているので気をつけるよう忠告を受ける。そのおかげで襲撃をかわすことができた皇帝は、その恩に三人の願いを聞き入れ、刀礼を施して騎士にした。

「皇帝フリードリヒとベルゲンの死刑執行人」赤ひげの皇帝は、狩りの最中に家来たちとはぐれてしまった。すると二頭の猪が突如現れ、一頭が皇帝を倒した。もう一頭が襲い掛かる直前に、死刑執行人が皇帝を救った。死刑執行人は皇帝を家来の所まで送り届け、その場で刀礼を受けた。

「死刑執行人と皇妃」皇帝と皇妃による仮面舞踏会が宮廷で開催された。騎士に変装した死刑執行人は皇妃と踊るのであるが、皇帝に本当の身分がわかってしまう。皇妃の身を汚した罪により、死刑執行人は死を言い渡される。自分を殺しても事件が起こらなかったことにはならない、宮内官にして欲しいと、執行人が意を表した。皇妃の名誉が保たれるその提案を受け入れた皇帝は罪人に刀礼を施し騎士とした。

²⁶ (Hrsg.) Nickel/Weiß, *Carl Zuckmayer 1896-1977*, a. a. O., S. 235.

²⁷ Ebd..

²⁸ *Wiener Allgemeine Zeitung* (am 16. Dezember 1933). In: Nickel, *Carl Zuckmayers Der Schelm von Bergen*. In: (Hrsg.) Nickel, *Rotermund und Wagener, Zuckmayer-Jahrbuch*, a. a. O., S. 222-223.

はじめに、短編『ベルゲンのならず者』を考察するが、短編と戯曲の作品全体の比較解釈をするのではなく、父親である老死刑執行人が息子に家業を継ぐように説く場面の部屋に飾られた絵画と息子の名前についての解釈を試みる。フォン・デア・トラウンの死刑執行人は、少年イシマエルと一緒に砂漠へ追放されたハガルの絵を飾っている²⁹。その絵の中でハガルは恨めしそうに街へ視線を向けているが、息子イシマエルは生き生きとした悪戯っぽい目で前方を果敢に見つめている³⁰。この絵の前で、父親は息子に次のように言う。

イシマエル！（中略）お前は生まれながらにして共同体から追放されているから、そのように名付けたのだ。（中略）ハガルの息子のように射手になるがよい。素早く幸運を射るのだ³¹。

下女が主人の身勝手に追放される一場面の絵を飾る死刑執行人は、身分に対する怒りを抱いているにちがいない。だが掟に従い、首切りの家業から逃れることが出来ない運命を父親は受け入れている。だからこそ、ハガルに共感した死刑執行人は、後継者である自分の息子に「イシマエル」と名付けた。

一方、ツックマイヤーの老死刑執行人が飾っている絵は、血に染まったイバラの冠をかぶったキリストである。その絵の前で老死刑執行人は、翌朝の処刑へ行き、子どもを絞殺した母親の首切りを果たすよう息子に命じる。子どもを守り抜こうとするハガルとは対照に、酷い困窮の中での不安からとはいえ、子を殺してしまった母親の姿に非道を感じざるを得ない。だが、この母親自身もまだ子どもの年齢であり、その母親に向ける老死刑執行人の愁いを会話から感じ取ることができる。

さらに、二作品における息子の名前について注目してみる。フォン・デア・トラウンの「イシマエル」については前述の通りである。ツックマイヤーの老死刑執行人は、「ヴィンセント」と息子に名付けている。作品発表当時、ドイツ国内での上演は禁止されていたが、ツックマイヤーは上演を諦めてはいなかったはずである。それゆえ、アラブ系の名であるイシマエルのままではその機会を逃すと思い、ラテン語の「vincens, 打ち勝っている」に由来している「ヴィンセント」を選んだにちがいない³²。名前の選択に関してニケルは、「身分社会の制度を克服した社会的アウトサイダーの勝利が、この作品における注目点である³³」と述べている。身分制度の視点だけで解釈をす

²⁹ Julius von der Traun, *Der Schelm von Bergen*, Berlin: Meyer & Jessen, 1911, S. 46.

³⁰ アブラハムの妻サラは自分には子は授からないと思って、女中ハガルを連れてきて夫に床入りを勧めた。そしてハガルはイシマエルを産んだ。その後サラが産んだイサクをイシマエルがからかうようになると、サラはハガルとイシマエルを追い出すように夫に懇願する。アブラハムにとって不快な事だったが、神がサラの懇願を聞き入れるように命じると、彼はハガルに食料を与えて去らせた。（創世記 第16章3-9-第21章17）

³¹ von der Traun, *Der Schelm von Bergen*, a. a. O., S. 51.

³² Nickel, *Carl Zuckmayers Der Schelm von Bergen*. In: (Hrsg.) Nickel, Rotermund und Wagener, *Zuckmayer-Jahrbuch*, a. a. O., S. 228.

³³ Ebd..

れば、ニケルの説で十分であろう。しかし、反ナチスの視点からも「ヴィンセント」を読み解く必要がある。ドイツ国内上演を期待し、勝利に関する名前を付けるのであれば、アーリア的な「Siegfried」, 「Siegmund」, そして「Siegbert」など、「Sieg」にちなんだ名前を選択したのでであろう。だがツックマイヤーは、ヒトラーが好んでいたこの「Sieg」言葉を意図的に避けたと考えられる³⁴。その結果、ニケルが言うように、「vincens」を基にして「ヴィンセント (Vincent)」と名付けた可能性は高まる。

次に、ハイネのバラード「シェルム・フォン・ベルゲン」について考察する。ハイネの学友ウィルヘルム・スメツ (Wilhelm Smets, 1796-1848) は、テオバルトの名で1821年の『ラインローヴェストファーレン年刊詩集 (*Rheinische-westfälischen Musenalmanach*)』に「ベルゲンの死刑執行人」を発表した³⁵。このバラードを読んだハイネは、「テオバルトの『シェルム・フォン・ベルゲン』の題材は、たいへん素晴らしい。比類がないに等しい³⁶」とスメツ宛ての手紙に綴っている。その後ハイネも、1846年に同タイトルのバラード「シェルム・フォン・ベルゲン」を発表する(参考資料参照)。ツックマイヤーは、そのバラードの最終節(下記)に注目し、戯曲を執筆したと思われる。

そういう訳でこの絞首官吏は貴族になった
加えてシェルム・フォン・ベルゲン家の始祖も。
誇り高い一族！ この一族はライン河畔で繁栄していた。
今は石の棺の中で眠っている。

このバラードは、絞首官吏から貴族へ身分を変えて一時代を謳歌した一族が描かれている。しかし、最終行で「今は石の棺の中で眠っている」と記されているように、この一族は未来永劫に栄えることは無かった。ツックマイヤーは、戯曲『ベルゲンのならず者』の読者／観客にこのハイネのバラードの最終節を連想させたかったと推測できるのである。

また、ジムロックのバラードは「フランクフルトのレーマーで本日皇帝選挙が行われた」で始まり、ハイネのバラードは「ライン川沿いのデュッセルドルフにある城で／仮装大会が催される」で始まっている。ツックマイヤーの戯曲の冒頭は、「今日のデュッセルドルフから遠くない場所のとあるライン川の島カイザー・ヴェールトにて」である。死刑執行人の伝承が多いフランクフルトではなく、デュッセルドルフが舞台である戯曲は、ハイネのバラードを思い起こさせることによって成

³⁴ 松田 (左右社, 2017), 13 頁参照。

³⁵ (Hrsg.) Friedrich Raßmann, *Rheinisch-Westfälischer Musenalmanach*. Band 1821, Hamm: Schluß und Wundermann, 1821, S. 158-161.

³⁶ (Hrsg.) Gustav Karpeles, *Heinrich Heine's gesammelte Werke*, Berlin: G. Grote'sche Verlagsbuchhandlung, 1887, S. 102.

立するのではなからうか。フランクフルトで開催された仮面舞踏会の出来事をモチーフに創作したジムロックとスメツのバラードではなく、ハイネのバラードを連想させるために、ツックマイヤーは戯曲の冒頭に「デュッセルドルフ」を据えたと考えられる。永遠に続かなかった一族と同様に、ナチスの政権は長続きしないというツックマイヤーの意の表れではないだろうか。

第3章 老死刑執行人を介して見えてくる身分と反ナチズム

戯曲において、ツックマイヤーはどのように反ナチズムを表現したのだろうか。作品を読み進めると、老死刑執行人が作者の代弁者であるかのように存在を強めてくる。そこでこの章では、この老死刑執行人に注目して作者の意図を解明していく。

老死刑執行人は、苦悶する人々を一刻も早く楽にするためのものだとし、首切りの役目を果たしている。序章で記したように、先祖は代々ベルゲン伯爵令嬢の侍医を務めていた家系であったことから、この老死刑執行人も平常に医学の知識に基づきながら、自宅の庭で様々な植物や野菜を栽培し、そこから得た知識を弟子たちに伝授している。同時に、その知識を活かして幼児誕生を促す手助けも行っている。掟から逃れられない、そして、「生」と「死」に接しながら暮らしている老死刑執行人は、ナチスの台頭によって迫害されるユダヤ人を連想できるのではなからうか。1930年頃、ドイツに暮らす祖父母四人がユダヤ人という純粋のユダヤ人は、人口の0.9%弱の約56万人。祖父母のうち二人がユダヤ人、祖父母のうち一人がユダヤ人というユダヤ人を加えても約56万人程度、人口の約1.3%だった³⁷。それにもかかわらず、単一民族国家を夢想していたヒトラーにとって、ユダヤ人は邪魔な存在であった。アーリア人種は世界一優秀であり、その優秀な人種で構成された国家は、全てを支配する権利があるという勝手な理屈をつけ、ナチスは「アーリア化（アーリア民族化）」を推し進める。ナチス政権下では、アーリア人以外は支配される側の人間、アーリア人以外の人種は劣等で不要な存在であると判断されている³⁸。このナチスの考えに対抗する言葉を、老死刑執行人が農園手伝いの少年に接ぎ木を教える過程で述べる。

[...] Ist ein Edelwuchs, das Stämmlein hier — Setzling aus alter Hochzuchten. Will aber kein Frucht mehr tragen, ist keim schwach, wurzelmüd. Was ich jetzt einsteich in seine wunde Seiten, das ist ein Wildreis, ein unzehmes, ganz wald- und heidgemeines.³⁹

(中略) 立派に育っている、ここに小さい幹があるだろう—前に品種改良した挿し木だよ。これとは反対になかなか実らないときは、芽が弱く、根が弱っているのだ。今切り込みを入れた

³⁷ 松田 (左右社, 2017), 56-57 頁参照。

³⁸ 同上, 71 頁参照。

³⁹ Zuckmayer, *Der Schelm von Bergen*. In: Zuckmayer, *Gesammelte Werke*, a. a. O., S. 440.

所に突き刺しているのは、野生の枝なんだよ。栽培したものではなく、森や荒野に普通に生えているものだよ。

ツックマイヤーが「Edelwuchs（立派に育つ）」、「Stämmlein（小さい幹）」、「Hochzuchten（品種改良）」、そして「Wildreis（野生の枝）」、「wald-und heidgemeines（森や荒野に普通にある）」を用いていることに気が付くであろう。それぞれ「Edel（貴族）」、「Stamm（氏族）」、「Hoch（高位）」という高貴な印象を残す言葉と、「Wild（野生）」、「wald-und heid（森や荒野）」といった庶民的な言葉を用いていることから、中世における身分の対比を想像させる言葉を意識していたと考えられる。品種改良された植物と野生の植物の、互いの良いところを上手に活かしながら丈夫に育てていく、つまり、人類は人種に関係なく互いが助け合って生きていくべきである、ということをツックマイヤーは表現したにちがいない。仮にツックマイヤーが民族を区別することに賛成していたならば、立派に育っている（Edelwuchs）幹に野生の枝（Wildreis）を接ぎ木するはずがない。やはりこの場面では、単一民族ではなく、多種多様な民族が互いに支えあうことで、より強い国家が成立することをツックマイヤーは示唆しているのではなからうか。

他にも人種を連想させる場面がある。腕に力が入らなくなった老死刑執行人である父親から、翌朝の任務を代わりに遂行して欲しいと言われたヴィンセントは、それを拒否する。しかし、その願いが叶わず、絶望する息子に父親は次の言葉をかける。

私が死んだとしても、お前を助けることはできないのだ。お前はそれが分からないのか。我々には身分という烙印が押されてしまっている—そして誰にも消し去ることができない。たとえ逃げ出したとしても—お前は首切りの息子のままなのだ⁴⁰。

この言葉には、ツックマイヤー自身と重なる点がある。ツックマイヤーの母方の祖父がユダヤ人であったことに目を付けたナチスは、ツックマイヤーを「ユダヤのアスファルト文士（judischer Asphaltliterat）⁴¹」と侮蔑し、ツックマイヤーの全戯曲をドイツ国内で上演禁止にしたのである。

⁴⁰ Ebd., S.474.

⁴¹ Susanne Buchinger, *Zwischen Heimat und Exil. Der rhein- hessische Schriftsteller Carl Zuckmayer*. URL: https://politische-bildung.rlp.de/fileadmin/files/Blaetter_zum_Land/BRZ_Zuckmayer.pdf (abgerufen am 10. 4. 2020)

「アスファルト文学（Asphaltliteratur）」は、ドイツ文学において大都会の諸事象を素材とした文学である。ドイツ語圏ではヴィーンとベルリンを中心に発展し、1920年代ベルリンの都市大衆文化を背景に頂点に達した。「アスファルト」の語は大都会、とりわけベルリンの代名詞のごとく用いられた。なかでもゲルマン主義や郷土芸術を叫ぶナチスは、ユダヤ系そして左翼アヴァンギャルド系の文士・ジャーナリストたちを主たる担い手とするベルリン大都会文学をしばしば「アスファルト文学」あるいは「文化ボルシェヴィズム」と誹謗、攻撃した。デジタル版 集英社世界文学大事典, JapanKnowledge, URL: <http://japanknowledge.com>, (参照日 2020年4月6日)

変えることができない血族や人種を作品では「身分」に置き替え、ナチスが排除しようとするアーリア人以外の人種に対する理不尽さを、ツックマイヤーは表現したのであろう。

また、この作品には、演劇の効果を発揮した場面がある。戯曲が舞台化される際には、言葉にせずつとも何を訴えようとしているのかを観客に伝えることができる「視覚」も重要となる。老死刑執行人が息子に首切り役を代わるように告げる場は、次のト書で始まる。

老死刑執行人の自宅にて。彼の部屋：医学者、占星術師のような。(中略)。血に染まったイバラの冠を着けたキリストの頭が、鮮やかな色で棚の扉に描かれている。夕日が窓から斜めに差し込んでいる。老死刑執行人は木製の安楽椅子に深く座っている。彼の右腕はだらりと垂れさがっている。その手は蠟のようになって動かない。彼の傍らに黒い姿の使いの者が立っている⁴²。

血の「赤」、夕日の「^{こがね}黄金」、そして使者が着ている「黒」の三色からドイツの国旗、つまり、「ドイツ」を視覚でもって観客に印象付ける効果を狙ったと推測できる。読者よりも観客の方が、作者のメッセージを強く受け取ることができたのではなかろうか。例えば、だらりと垂れさがって動かない右腕がそうであろう。舞台上の動かない右腕を見続けている観客は、ナチス内で義務化されている右腕を斜めに挙げるナチ式敬礼を頭に浮べたのではなかろうか⁴³。ハーケンクロイツがナチスを象徴するように、敬礼もまたナチスを象徴する。この象徴を逆手に取ったツックマイヤーの意図を感じ取ることができる。そしてこの場は、老死刑執行人が初めて務めを果たした夜に鎌の刃に刻み込んだ言葉、「やるのだ—この者に命中させろ—苦しみからの解放だ！」で終わる。国民の不安をあおり、国民を苦しめるナチスの危険をいち早く察し、この政権が長く続かないことを切望すると同時に、ナチスに立ち向かうことを決めたツックマイヤーの覚悟の言葉であると解釈することができるのではなかろうか。

この場は、黒い服をまとった使者が（「黒」も親衛隊を連想させるのであるが）、老死刑執行人に翌朝の処刑で首切りをする順番が回ってきたことを告げることから始まる。家業を継ぐことを拒む息子に、「お前が出来ないのであれば、私は殺されに行かねばならない⁴⁴」と父親は言う。そう知らされたヴィンセントは驚愕する⁴⁵。

⁴² Zuckmayer, *Der Schelm von Bergen*. In: Zuckmayer, *Gesammelte Werke*, a. a. O., S. 470.

⁴³ 松田（左右社、2017）、183-184頁参照。

元来この右手を挙げる挨拶は、カエサルが暗殺された後に武器を持っていないことを証明するための挨拶として古代ローマで始まったらしい。この敬礼をムッソリーニが、そしてムッソリーニからヒトラーは学んだ。この挨拶は、1926年からナチ党で義務化された。

⁴⁴ Zuckmayer, *Der Schelm von Bergen*. In: Zuckmayer, *Gesammelte Werke*, a. a. O., S. 473.

⁴⁵ Ebd..

ヴィンセント：父さんが — 僕が継がないせいで？

死刑執行人：それが掟だ。後継者がいない場合や、死刑を執行できなくなった首切り人は、自ら苦悶しなければならない。しかし剣ではない。大衆が石を投げて死に至らすのだ。

ヴィンセント：父さんは、大衆にとっての友 — 頼りになる人だったのに。一人も石を投げやしないよ！

死刑執行人：確信している — 彼らは投げつける！ 捕吏が先導したら — そうすれば誰もが一緒にやるというものだ。民衆は意思がない — 責任がない。一人だけの時は善良で、たくましく、判断力がある。三人以上集まると — 群衆になる。群衆はもはや視界がなくなり、窪んだ所へ駆けて行くのだ。

たとえ善人な人間であったとしても、その者が集団の中の一人になると殺害をもいとわない人間に変わると、老死刑執行人は断言している。このような心理を利用したのがナチスである。ユダヤ人迫害政策の一つが、大衆を巻き込んだユダヤ人商店の不買運動である。ユダヤ人がドイツの富や文化を独占していると、謀略的な噂を流すことで大衆の嫉妬心をかき立て、争いを起こした。世界大恐慌から数年が経っても苦しい生活から脱却できない大衆の心理を突き、ナチスは第一党としての座を揺るぎないものにしていくのである。老死刑執行人の言葉は、ナチスに操られて、周囲の熱狂に惑わされて冷静な判断を失っていく国民に向けた皮肉と嘆きを込めたツックマイヤー自身の言葉であるのかもしれない。

ところで、タイトルに使われている「Schelm (Schelm)」の語源に注目すべきことがある。この語は、中高ドイツ語と初期の新高ドイツ語では「(酷使されて) 死んだ家畜、倒れた家畜、死骸」を指していたが、「(戦で倒れた) 人間の死体」などを指す場合もあった。「schelm」はのしり言葉にもなり、「死刑執行人、皮剥ぎ」といった不名誉な添名やあだ名、あるいは「悪魔」を表す言葉としても使われていた。1200年頃には既に、現在使われているような「極悪人、盗人、誘惑者、裏切り者、悪戯者」を表現する単語としても使われていた。興味深いことに、これらの意味が拡大解釈されて「感染病」や「伝染病」の意味もあった⁴⁶。ツックマイヤーは、ナチスに対して「悪魔」の意味だけではなく、伝染病のように広まる大衆心理の特性をもタイトルに込めたのではないだろ

⁴⁶ *Deutsches Wörterbuch von Jacob und Wilhelm Grimm*, Band 14., München: Deutscher Taschenbuch Verlag, 1984, S. 2506-2508.

作品内でツックマイヤーは、死刑執行人を「Scharfrichter」と表記している。死刑執行人が自身の職業を述べる場合は「Henker」を用い、「Schelm」は皇帝と皇妃がヴィンセントに向けて使っている。作品の中核は、後先を考えずに身分違いの恋愛を突き進むヴィンセントであり、この戯曲を『ベルゲンの死刑執行人』と訳した場合、父親が主人公である印象を与えてしまう可能性がある。『ベルゲンの悪戯者』と訳した研究者がいるが、ヴィンセントが子どものように悪戯をしたのではなく、法を犯した罪人であることから、筆者は本作品を『ベルゲンのならず者』と訳した。

うか。

終章

ツックマイヤーは、『ケーペニックの大尉』のように社会を賑わせた実話ではなく、ナチスの拘束力が及ばない中世を題材に用いることでナチスの目をそらし、ファシズムに傾向しない作品を発表した。ツックマイヤーは、ナチスが台頭することによって生じ始めた国内外の問題に背を向けたのではなく、ナチスに立ち向かう戯曲『ベルゲンのならず者』を完成させたのであった。ドイツから離れてオーストリアに住み、そこで執筆した作品がドルフースの理想とした国家政策を連想させる部分が多い内容であったために、オーストロファシズム寄りの作品であると評価されてしまったことはやむを得ない。ニケルやロータームントだけでなく、ミュージも「ヒトラーの政権掌握から1939年までのおよそ5年間、(中略)注目すべきツックマイヤーの戯曲は一つも無い。一貫して政治とは関係のない映画脚本や散文がほとんどである。亡命早期の二つの戯曲は現代を舞台にしておらず、アメリカに亡命して創作した『悪魔の將軍』によって再び問題に向き合う時事性のある作品に取り組んだ⁴⁷」と記している。だが本稿で論じたように、ツックマイヤーが抱えている人間及び社会に向ける強い関心は、作中の二人の人物によって示されている。老死刑執行人の語る接ぎ木の話によって人種差問題を、従事が皇妃を論ず内容から身分を、只中に起こっている時事性を帯びた問題をツックマイヤーは提唱しているのである。そして、個人の信念が重要であることを、向こう見ずなヴィンセントを通じて提示していると考えられる。

一方、皇妃が身分を捨ててまで身を捧げさせるような魅力を、ヴィンセントの人物描写に感じ取ることには難しいのではなかろうか。その場の思いつきだけで行動して若さだけが目に留まる彼に、ツックマイヤーはヒトラーを写していたのかもしれない。その視点で作品を捉えてみると、ヒトラーの暴挙に従っているナチ黨員や選挙でナチ党を選んだ国民が、助命嘆願する罪人に恩赦と慈悲を与える高齢の皇帝に例えられているようにも見えてくる。宿した子どもは皇帝の子ではないと、皇妃から告げられたにもかかわらず、皇帝は王家継承の危機から救われたと安堵する。そのうえ、皇妃の名誉を汚さないために死刑執行人であるヴィンセントを貴族の身分にしたことで、皇帝が単なる好人物である印象が残る。つまり、直面している問題を解決できればそれで良い、と考えているような国民の楽観さを、ツックマイヤーは揶揄しているとも解釈できそうである。だが、そうではない。ツックマイヤーが伝えたいことは、皇帝は機知に富み冷静さを失わない人物ということであろう。ツックマイヤーは皇帝を通じて、その冷静を国民に求めたにちがいない。中世では皇帝が法そのものだったが、今や国民の意思が反映される時代になったのだ。国民が選挙でナチ党を選んだその結果、社会がどのようなになっているのかを見定め、間違った選択であったことに気付かせる。そして、皇帝のように冷静になって賢明な判断をすることを、ツックマイヤーは国民に伝えた

⁴⁷ Mews, *Die unpolitischen Exildramen Carl Zuckmayers*, a. a. O., S. 139.

かったのではないだろうか。

ナチスの台頭により、多くの仲間たちが亡命した。オーストリアには危機が迫ってこないと感じて疑わないツックマイヤーは、早く逃げるように忠告する友人たちの言葉を聞き入れずに、ヘンドルフに留まっていた⁴⁸。その間も、引き続きドイツで出版できるようにドイツ人作家帝国協会の会員資格の申請を続けている⁴⁹。おそらくツックマイヤーは、ナチス政権が短命であると考えていたのであろう。しかし、ツックマイヤーの予想に反して、ナチスは衰えるどころか増々強固になり、その勢力範囲を広めていく。ツックマイヤーは、1937年に史実と創作を組み合わせる再び中世を舞台にした戯曲『ベルマン』を発表後、遂にアメリカに亡命する。そして亡命先で戯曲『悪魔の將軍』(1946)を執筆した。ナチス政権への嫌悪が作品内に巧みに組み込まれたこの二作品にも、反ナチズムの態度を取り続けるツックマイヤーの姿が反映されているのであった。

⁴⁸ Zuckmayer, *Als wär's ein Stück von mir*, a. a. O., S. 64, 533-535.

⁴⁹ (Hrsg.) Nickel/Weiß, *Carl Zuckmayer 1896-1977*, a. a. O., S. 229.

1933年7月23日の申請は直ぐには通らず、1934年1月1日にやっと申請が通った。おそらく俳優のヴェルナー・クラウス (Werner Krauß, 1902-1959) とオイゲン・クリェプフター (Eugen Klöpfer, 1886-1950) のとりなしによるものであろう。しかし1935年7月8日、海外で暮らしている作家に対して協会に入るは資格を与えないという理由で作家リストから除籍されたが、それでもなお、ツックマイヤーの作品はドイツ国内でも印刷も販売もできた。

【参考資料】 ハイน์リヒ・ハイネ「シェルム・フォン・ベルゲン」

Schelm von Bergen

Im Schloß zu Düsseldorf am Rhein
Wird Mummenschanz gehalten;
Da flimmern die Kerzen, da rauscht die Musik,
Da tanzen die bunten Gestalten.

Da tanzt die schöne Herzogin,
Sie lacht laut auf beständig;
Ihr Tänzer ist ein schlanker Fant,
Gar höfisch und behendig.

Er trägt eine Maske von schwarzem Samt,
Daraus gar freudig blicket
Ein Auge, wie ein blanker Dolch,
Halb aus der Scheide gezückt.

Es jubelt die Fastnachtsgeckenschar,
Wenn jene vorüberwalzen.
Der Drickes und die Marizzebill
Grüßen mit Schnarren und Schnalzen.

Und die Trompeten schmettern drein,
Der närrische Brummbaß brummet,
Bis endlich der Tanz ein Ende nimmt
Und die Musik verstummet.

»Durchlauchtigste Frau, gebt Urlaub mir,
Ich muß nach Hause gehen – «
Die Herzogin lacht: »Ich laß dich nicht fort,
Bevor ich dein Antlitz gesehen.«

»Durchlauchtigste Frau, gebt Urlaub mir,
Mein Anblick bringt Schrecken und Grauen – «
Die Herzogin lacht: »Ich fürchte mich nicht,
Ich will dein Antlitz schauen.«

シェルム・フォン・ベルゲン

ライン川沿いのデュッセルドルフにある城で
仮装大会が催される。
そこで蠟燭がきらきら光っている、そこで音楽が鳴り響き
そこで色とりどりの人々が踊っている。

そこで美しい侯爵夫人が踊っている、
彼女は絶えず大きな笑い声をあげている、
彼女の踊り相手はとある細身の若い伊達男だ、
まさに優雅で機敏

彼は黒いピロードの仮面を着けている、
目が一つ、喜ばし気に覗いている
抜き身の剣のようだ、
鞘から半分引き出された

謝肉祭で羽目を外す者達の一団が歓声をあげる、
その二人がワルツを踊りながら通り過ぎると。
あのドゥリケスとあのマリツツェビルが
ガラガラ、パチパチ音を鳴らしながら挨拶をする。

そしてトランペットがその中に高く鳴り響く、
狂ったようにコントラバスが低く轟いている、
やっとなりが終わり、
音楽も鳴り止むまで。

「妃殿下、私に暇(いとま)を下さい、
私は家に帰らねばなりません—」
公爵夫人は笑う。「私はそなたを帰らせません、
私がそなたの顔を見るまでは。」

「妃殿下、私に暇を下さい、
私を見ることで驚きと恐怖が引き起こされます—」
公爵夫人は笑う。「私は恐れませんが、
私はそなたの顔を見たいのです。」

»Durchlauchtigste Frau, gebt Urlaub mir,
Der Nacht und dem Tode gehör ich – «
Die Herzogin lacht: »Ich lasse dich nicht,
Dein Antlitz zu schauen begehrt ich.«

Wohl sträubt sich der Mann mit finstern Wort,
Das Weib nicht zähmen kunnt er;
Sie riß zuletzt ihm mit Gewalt
Die Maske vom Antlitz herunter.

»Das ist der Scharfrichter von Bergen!« So schreit
Entsetzt die Menge im Saale
Und weicht scheusam – die Herzogin
Stürzt fort zu ihrem Gemahle.

Der Herzog ist klug, er tilgte die Schmach
Der Gattin auf der Stelle.
Er zog sein blankes Schwert und sprach:
»Knie vor mir nieder, Geselle!

Mit diesem Schwertschlag mach ich Dich
Jetzt ehrlich und ritterzünftig,
Und weil du ein Schelm, so nenne dich
Herr Schelm von Bergen künftig.«

So ward der Henker ein Edelmann
Und Ahnherr der Schelme von Bergen.
Ein stolzes Geschlecht! Es blühte am Rhein,
Jetzt schläft es in steinernen Särgen.

aus: „Romanzero“

「妃殿下、私に暇を下さい、
私は夜と死に握られておりますー」
公爵夫人は笑う。「私はそなたを放しません、
そなたの顔を見ることを私は望んでいるのです。」

その男は暗い言葉で抗う、
その婦人を彼は説得できない、
彼女はついに力づくで剥ぐ
彼の顔から仮面を

「あれはベルゲンの死刑執行人だ！」そう叫ぶ
広間の群衆は驚いて
そして怖気ついて後ずさりする — 公爵夫人は
彼女の夫の元へ慌ただしく逃げていく。

公爵は賢明である、彼は不名誉を打ち消した
妻のためにその場で。
彼は自分の白く輝く剣を抜き、言った。
「私の前で跪け、若者よ！

この剣の一打ちで私はお前をしてやろう
たった今、しかるべくそして正規の騎士に、
そしてお前は死刑執行人であるから、自分を名乗るがよい
今後はシェルム・フォン・ベルゲンと。」

そういう訳でこの紋首官吏は貴族になった
そしてシェルム・フォン・ベルゲン家の始祖も。
誇り高い一族！この一族はライン河畔で繁栄していた。
今は石の棺の中で眠っている。